

「仕事ができる社員、できない社員」という本からです  
「ムダな体力」を使わない人 「ここぞ」の場面で力が出せるか、出せないか

ここぞという場面で実力が出せるかどうかは、結局のところ平素からどのような働き方をしているかに帰結します。確実にいえることは、いつも「体力勝負」の仕事をしていて、平素から疲労困憊しては、実力は発揮できません。ですから、仕事ができる社員は、普段は頭を使って仕事をし、体力を温存できるように最大限の工夫をします。体力があるから、やる気や気力、意力を保つことができるし、それらの条件がそろってようやく能力を存分に発揮することができます。仕事を通して私たちが対価をもらうとき、その評価に値するのは、能力の部分です。そのため、能力が低い人は、体力と気力を使って乗り切ろうとします。これは 1 章でも述べましたが、たとえば地面に穴を掘るのに、電動ハンマードリルやショベルカーを使わず、つまり頭を使わず、とにかく体力を使って、つるはしをただ振り回すだけの仕事の仕方—いくなれば、「つるはし仕事術」です。体力をすり減らしながら仕事をするを常にしてしまうと、対外的には「頑張っている！」という格好はつけられます。

しかし、そういった「つるはし仕事術」をよしとする考え方が会社の中に巣くってしまうと、仕事の成果は阻害されます。その証拠に、通勤中、帰宅中の電車で揺られるサラリーマンの大半はとうとうと眠っています。一方、海外でもエグゼクティブといわれるビジネスマンは、移動中の時間を活用して一生懸命仕事をします。乗り物に乗るとすぐに寝るのは、日本人くらいです。それは特技でも、治安がいいからというわけでもなく、単にくたびれているに過ぎません。体力を使う仕事の仕方しか知らないからです。また、頭を使わない仕事でもよしとする社会だから、「つるはし仕事術」に歯止めをかけるどころか、かえって助長してしまいます。

「ここぞ」という場面で実力を出すためには、常に頭を使って仕事をしなければなりません。体力と気力ではなく、能力を発揮して働くのです。温存された体力はいざというとき発揮されます。緊急事態が真夜中に起こっても、休日に起こっても対処できる馬力が残っています。そこで馬力が利かない人は、仕事ができない人です。目に見えて仕事ができないわけではなく、仕事のテクニックは鍛えているのである程度の能力があることは間違いありませんが、毎日の仕事でくたびれてはているため、本当に馬力が必要になったときにはもう使える体力が残っていないのです。しかし、頭を使って仕事をする人は社内で嫌われがちです。たとえば、体力を消耗しないために、基本的には定時になったらさっさと帰るからです。就業時間内にきちんと仕事を終えていても、滅私奉公型を好む日本社会ではあまり歓迎されないタイプといえます。とはいえ、日本のビジネスマンの中にも、滅私奉公型から脱したいと考えている人は増えているようです。ワーク・ライフ・バランスへの関心が高くなる一方で、それが日本社会で実現されないのは、入社してしまうと会社に求められるまま滅私奉公せざるを得ない環境が、すでに出来上がってしまっているからでしょう。「上司が会社に残っているうちは、部下は帰れない」という暗黙の了解がある会社も、いまだ珍しくはありません。難しい社会といえます。

とにかく、「いい仕事」をしたいのなら、体力を維持することが非常に重要です。よく運動をして、よく眠る—。シンプルですが、海外はエリートほど健康維持、体力維持に熱心に取り組めます。日本のビジネスマンに、そういう意識のある人がどれほどいるのでしょうか。そういう意味では、いざというときに力が発揮できない人は「エリートらしい働き方」が身につけていないわけです。体力勝負で乗り切ろうとするのは、軍隊でいえば一番格下の二等兵の働き方です。それが「間違っている」「このままではいけない」という感覚を自分の中に養っていけば、滅私奉公の働き方から脱却し、仕事ができる社員に近づいている自分に気づく日もそう遠くないはずですよ。

とにかく、「いい仕事」をするためにはどうすればいいと言っていますか？

( )